イスラームの人間観

—実存主義と存在即神の讃美の思想のつながりについて—

日大総研大学院(院) ○西村 征也

日大生産工 森山 茂

1. まえがき

『井筒俊彦著作集8』に「イスラームの人間観」という章がある。本発表では、イスラームにおける人間観を対照するために、実存主義を代表するサルトルの思想を取り上げて、考察を行う。

- 人間のみがもつ自意識
- 神の正義
- 「悪魔」の特徴と存在理由

2. サルトルの実存主義的存在論

第2章では、サルトルの実存主義的存在論について、「即自-対自」という概念が『コーラン』における人間観との関わりの中で重要であるので、その意味することについて考察を行う。

- 『コーラン』における人間の歩むべき正しい道

- 「即自-対自」

3. イスラームの人間観

第3章では、イスラームの人間観について下記項目を概観したい。

4. サルトルの実存主義的存在論とイスラームの人間観との比較

第4章では、サルトルの実存主義存在論と、イスラームの人間観の相違について考察をしたい。特に下記項目について注目して概観する。

- 唯一絶対神アッラー
- 存在即神の讃美
- 神と人間の関係について-絶対他力-
- 『コーラン』におけるアン・ソワ（即自性）とプル・ソワ（対自性）
- 神の捉え方
- 人間の捉え方
- 神と人間の関係
- 現世における実存のあり方

The Characteristics of Muslim

—Existentialism and the fundamental idea of Islam—

Seiya NISHIMURA and Shigeru MORIYAMA

5. まとめ

第5章では、発表のまとめについて述べたい。サルトルの実存主義的存在論で重視されているのは、対自存在である。即自は「意識の理想」として、対自に目標と目的を与えるが、対自は必ずしも即自存在になることはできないし、仮に即自存在になれたとしても、それはもはや人間ではないと言える。

つまり重要なのは、即自の無化、虚無、空虚と呼ばれる中で、葛藤を抱きながらも生きる姿が人間の本来の生きる姿であると捉えられている。ゆえに即自存在の強制的な締め付けは、対自の根源的な自由を侵害するだけでなく、存在欲求を抑制させることに他ならないので、「神」を特定し実体化することは、サルトルの実存主義からすると受け入れられない考え方である。またそれは「神」たるものが、所詮自己の意識の理想であるが故に、別の呼称であっても、実質的には変わらないことから説明できる。

一方、イスラームにおいては、人間の対自性を許容しているが、あくまで限定的である。それは、対自存在でありながら即自存在であろうとすることが正しい道と考えられているからである。本来人間は、神の創造物であるから、創造されたことに対する感謝を行うことは当然であるという考えが前提になっている。

また現世における実存のあり方について、二つの思想は類似している部分がある。サルトルの実存主義は、現世においていかに生きるのかが大きな問題であることは述べた。イスラームにおいても、「最後の審判」では、聖俗不分や贖罪観念の不在・拒否というイスラームの根本思想によって、いかに現世で生きてきたのかが大きな問題になることから、現世重視の思想が必然とされてくる。ただ現世主義は多数派と呼ばれるスンニー派中心の思想であり、シーア派やスーフィズムが異なる思想を持ち合わせていることには注意をしなければならない。しかしそこには、イスラーム内部におけるダイナミズムも見て取れるであろう。

「参考文献」

- 1) J-P・サルトル, 『存在と無(上)』, 松浪信三郎訳, 人文書院, (1999), pp. 563-596.
- 2) J-P・サルトル, 『サルトル(世界の思想29)』, 松浪信三郎訳, 河出書房新社, (1965), pp. 233-247.
- 3) 井筒俊彦, 『井筒俊彦著作集8』, 中央公論社, (1995), pp. 118-131.
- 4) 井筒俊彦, 『イスラーム文化』, 岩波書店, (1991), pp. 1-100.
- 5) 井筒俊彦訳, 『コーラン(上)』, 岩波書店, (2004).
- 6) 『新スタンダード仏和辞典』, 大修館書店, (1987).

ほか